

読書のすゝめ

その8

H 28 5 / 18

文楽鑑賞教室（国語科主催）

14日（土）に2・3年生の希望者20名が東京国立劇場（小劇場）で上演中の文楽鑑賞教室にかけ、近松門左衛門の名作『曾根崎心中』を観てきました。

人形の大きさは120cmから150cm。一体の人形を頭や顔にあたるかしらと右手を操作する「主遣い」、左手を操作する「左遣い」、足を操作する「足遣い」の三人で操ります。そして、「太夫」と呼ばれる語り手が状況の説明を節をつけて語り、太棹といわれる三味線の伴奏（BGM）がつけます。ちよっとした顔の角度や手の振り、人間（役者）以上にリアルな演技となり、参加した生徒の皆さんもすっかり魅了されたようでした。

昨年7月に歌舞伎鑑賞教室に参加してきましたが、文楽も日本人として誇るべき伝統文化です。外国人が訪日して、まず歌舞伎・能・文楽をみたい、と言います。「むずかしそう」とか「わからないから」とか言う前に、自分の目で見て、耳で聞いて、心で感じてほしいと思います。古文の授業で文字で追っていた作品が舞台でいきいきと使われていると、ことば（日本語）の美しさにも気付くはず。DVD付の本も図書館にあります。また、文楽（歌舞伎や能も）に関する本、写真集もぜひ手にとってみてください。



『あらすじで読む 名作文楽50』（世界文化社）

太夫・三味線・人形の織りなす華やかな文楽の世界。

「あらすじ」「観どころ」「聞きどころ」と美しい舞台写真で文楽の魅力がわかりやすく解説されています。

人気の演目を紹介しています。



『文楽ハンドブック』藤田洋（三省堂）
初心者から上級者まで使える充実した手引き。

※文楽に関わる小説・エッセイを紹介します。

『仏果を得ず』三浦しをん（双葉社）

高校の修学旅行で人形浄瑠璃・文楽を観劇した健は、義太夫を語る太夫のエネルギーに圧倒されその虜になる。以来、義太夫を極めるため、傍からはバカに見えるほどの情熱を傾ける中、ある女性に恋をする。芸か恋か。悩む健は、人を愛することで義太夫の肝をつかんでいく。若手太夫の成長を描く青春小説の傑作。

『あやつられ文楽鑑賞』三浦しをん（双葉社）

「この本は、文楽観劇のド素人であった私が、いかにしてこのとんでもない芸能にはまっていたかの記録である」と著者が語る、小説『仏果を得ず』とあわせて読みたい文楽エッセイ。文楽の真髓に迫るべく、資料を読み、落語を聞き、技芸員に突撃インタビューを敢行する。本校でも人気作家の三浦しをんが人形浄瑠璃・文楽の魅力に迫った一冊。



解説で使われた赤姫の人形が休憩時間にロビーに展示されました。



553の座席は満員！

本校生の他に2校ほど参加していました。わかりやすくドラマチックな展開にひきこまれあっという間の100分でした。

